

教 育 研 究 業 績

氏名 春日 学

学位：修士（教育学）

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学 教科教育学 教育に関する実務		算数科教育 学級経営 授業研究	
主要担当授業科目	算数科指導法 算数 教育方法論（ICT 活用の理論と方法含む） 情報機器の操作		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概要
1 教育方法の実践例			
○公立小学校における 28 年間の実務経験		H9. 4. 1～ R7. 3. 31	公立小学校にて教諭として 27 年間勤務し、第 2～6 学年の担任と算数少人数指導担当を経験した。 情報教育担当：GIGA スクール構想以前から、校内無線 LAN の構築や学校ウェブサイトの立ち上げ等を行い、運用の工夫を行った。 生活指導主任：児童の健全育成を目指し、基本的生活習慣の確立、校内外生活の安全確保、不登校の対応等に地域や関係機関と連携しながら組織的に生活指導を推進した。 教務主幹：カリキュラムマネジメントの視点を持ち、授業の質の向上と教員の働き方改革の両立を図れるよう学校運営の工夫をした。”
○情報モラルに関する授業公開		H17. 2. 4	東京都小学校視聴覚教育研究会第 51 回研究大会（江戸川区立鹿骨小学校）において、第 6 学年学級活動「情報モラルって何？」の授業を公開した。Web 検索での情報収集、ホームページ・電子メール等での情報発信の際には、コンピュータの向こう側にいる人を意識し、人と接するときと同じように情報モラルを考える授業を行った。授業の様子が日本教育新聞に掲載された。
○デジタルカメラの活用に関する授業公開		H18. 2. 10	東京都小学校視聴覚教育研究会第 52 回研究大会（台東区立蔵前小学校）において、第 1 学年生活科「1 ねんせいをむかえよう」の授業を公開した。本授業では、1 年生がデジタルカメラを活用して新 1 年生のために校内を撮影し、学校を紹介するポスターを作成した。
○子供の意欲を高める算数に関する授業公開		H26. 10. 25	新算数教育研究会第 30 回小学校算数教育研究全国（東京）大会（北区立王子小学校）において、第 1 学年「どちらがひろい」の授業を公開した。本単元のねらいは、身の回りにあるものの面積を直接重ね合わせたりものを並べたりして比べる活動を通して、面積の測定についての基礎となる経験を豊かにすることである。児童の意欲を高めるために、「比べてみたい」と感じる導入、「どうやって比べようか」と考える展開、「なるほど、わかった」と納得するまとめという 3 つの教師の意図的な働きかけを意識した授業を行った。
○臨時休校や学級閉鎖に伴うオンライン授業の実施		R2. 5～ R7. 3. 31	新型コロナウイルスによる臨時休校や、感染児童数の拡大による学級閉鎖の際に、Teams 等を活用したオンライン授業を実施した。教員間で実施方法の共有化や、保護者の協力依頼等の計画立案や準備作業を中心となって進めた。その結果、大きなトラブルなく、効果的にオンライン授業を実施することができた。欠席児童のオンライン参加や児童集会での活用等が日常化された。
2 作成した教科書、教材			
○教科書の編集協力		H28. 5～ R6. 3	東京書籍株式会社の小学校算数科教科書の編集に協力した。 「新しい算数」 問題の作成 校閲 教師用指導書の執筆 「新編 新しい算数」 執筆 校閲 教師用指導書の執筆

3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
○一般財団法人 総合初等教育研究所 第18回セミナー講師	H27. 2. 21	若手教員を対象に、算数科における「話し合い活動」について、ワークショップを行った。第4学年算数科「面積」の指導事例を提示し、参加者自身が話し合い活動を体験できるようにした。共同担当者：加藤賢一
○一般財団法人 総合初等教育研究所 第19回セミナー講師	H28. 2. 20	若手教員を対象に、算数科における「話し合い活動」について、ワークショップを行った。第5学年算数科「図形の角」の指導事例を提示し、参加者自身が話し合い活動を体験できるようにした。共同担当者：加藤賢一
○新算数教育研究会 第46回セミナー講師	R4. 12. 25	オンライン形式で一般の教員を対象に「自力解決と集団検討をつなぐーできた子もつまづいている子も価値ある時間にー」というテーマで講演を行った。算数科の授業における自力解決から集団検討へ展開する際の困難性の改善に向け、自力解決後の自己評価を生かした方法について、事例を通して提案した。現在、会員向けに動画が公開中である。
○台東区教育委員会 令和5年度若手教員育成研修 2年次講師	R5. 10. 25	2年次教員を対象に、第2学年算数科「かけ算」の研究授業を観察し、講評を行った。かけ算の指導上のポイント、式を読むことの意義、児童の反応を予測した指導計画を作成する重要性について、指導計画と授業の事実を関連付けながら説明した。
○江東区立第六砂町小学校 校内研究会講師	R6. 6. 19	該当校教員を対象に、第6学年算数科「分数のわり算」の研究授業を観察し、講評を行った。分数のわり算の指導上のポイント、中学校数学との連続性、効果的な少人数指導の方法について、指導計画と授業の事実を関連付けながら説明した。
	R6. 12. 10	該当校教員を対象に、第2学年算数科「かけ算」の研究授業を観察し、講評を行った。かけ算の指導上のポイント、上学年との連続性、効果的な学び合いの方法について、指導計画と授業の事実を関連付けながら説明した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
○小学校教諭1種免許状	H9. 3	東京都教育委員会
○学校図書館司書教諭講習単位習得	H13. 10	東京学芸大学
○小学校教諭専修免許状	R元. 10	東京都教育委員会
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
○平成22年度 台東区 ICT 実践開発校研究主任 (台東区立台東育英小学校)	H22. 4～ H23. 3	本研究では、「気負わず活用、ICT」を研究テーマに設定し、各教科領域において、大型テレビや実物投影機、インターネット等を活用した指導事例集を作成し、授業公開と実践報告会を実施した。研究主任として、実践報告書を作成し、ICT活用が効果的な場面や実践事例の提案を行った。
○平成22年度 東京都教育研究員 小学校算数	H22. 4～ H23. 3	本研究では、「表現力を育て、学びを深める指導の工夫ー伝え合いながら問題解決する授業を通してー」を研究主題に設定し、集団検討構想図を作成すること、児童が自分の立場を明らかにして集団検討に参加すること、まとめの充実を図ることの有効性を検証した。研究の結果、集団検討に参加する目的の明確化、児童が自らまとめを書くことができる、児童自らが理解の度合いを自己評価できるといった成果が見られた。

○台東区教育研究会算数部副部長	H23. 4～ R7. 3	台東区教育研究会算数部では、台東区内全小学校の算数科を研究教科とする教員が所属し、研究活動を行っている。「数学的な思考力、判断力、表現力を育てる指導の工夫」を研究主題に設定し、継続的に研究を進めてきた。副部長として、年間3回の授業研究会、東京都算数教育研究会と連携して実施する実態調査の分析、研究紀要の作成を組織的に運営できるよう、計画、調整、助言を行ってきた。
○平成 23・24 年度 台東区教育委員会研究協力学校 研究主任 (台東区立台東育英小学校)	H23. 4～ H25. 3	本研究では、「主体的に地域へ関わる児童を育てる ～人との関わり、地域にふれる活動を通して～」を研究主題に設定し、学習過程の中に人との関わり、地域の特色にふれる活動を効果的に取り入れることにより、児童の地域社会の一員としての自覚を育むことができた。
○東京都算数教育研究会 資料委員会委員	H23. 5～ H29. 3	東京都算数教育研究会の研究組織の一つとして、都内全小学校を対象に実施する実態調査の分析結果をもとに、課題の改善を目指した指導資料を作成した。研究成果を研究発表会、研究紀要を通して、全都に発信し、授業改善に向けた提案を行った。
○東京都教育委員会研究開発委員 小学校算数	H26. 4～ H27. 3	本研究では、研究主題を「一人一人の思考力・表現力を育てる指導の工夫 ～関数の考えを大切にした授業～」と設定し、①ある場面での数量や図形についての事柄が、ほかのどんな事柄と関係するかに着目できるようにする。②二つの事柄の関係を調べる活動を取り入れる。③見いだした規則性を様々な問題の解決に活用し、その思考過程や結果を表現したり説明したりする活動を取り入れることの3点を重視した指導事例を作成した。
○平成 26・27 年度 台東区教育委員会研究協力学校 平成 27 年度国立教育政策研究所 学習指導実践研究協力校研究主任 (台東区立台東育英小学校)	H26. 4～ H28. 3	本研究では、研究主題を「自らの思考力・表現力を高め合う指導の工夫 ー算数科を中心にー」と設定し、「自らの思考力・表現力」を「児童一人一人が見通しをもち筋道立てて考え問題を解決する力、問題を解決する過程で自分の考えをいかしたり伝えたりする力」ととらえた。自分の考えを表現したり、説明したりする活動の充実が、思考力・表現力の育成につながるという仮説をもとに研究を進めた。研究主任として、研究理論の構築と授業公開を行った。
○文部科学省 教育映像等審査協力者（第 13 分類）	H27. 4～ R7. 3	文部科学省教育映像等審査の算数科に関する教育映像等の審査にあたり、学識経験者として学校現場における授業活用の視点に立った意見を述べた。
4 その他		
○平成 24 年度台東区教育委員会 優秀教員奨励賞	H25. 3	台東区教育委員会より、優秀教員として表彰を受けた。
○平成 26 年度東京都教育委員会 職員表彰	H27. 1	東京都教育委員会より、職員表彰を受けた。
○平成 27 年度文部科学大臣 優秀教職員表彰	H28. 1	文部科学大臣より、優秀教職員として表彰を受けた。
○公益財団法人 日本教育公務員弘済会東京支部 教育実践論文優秀賞	R5. 12	論文主題は、「1 人 1 台端末時代の小学校低学年における情報モラル指導のあり方 ～ゲーム、インターネットへの依存に着目して～」である。筆者が行った児童、保護者への実態調査結果からは、低学年の段階ですでにゲームやインターネットが児童にとって身近なものになっていること、低学年の児童においても依存を自覚していること、保護者は、我が子の依存に問題意識はもっているがどう対応すべきか苦慮していることが明らかになった。これらの実態を踏まえ、2 年生を対象に学級活動 (2) 「やりすぎではないかな」の授業を実践した。探究的な課題追究の過程として3つの場面を設定、実態調査結果の活用、思考ツールを用いた話し合い、学習カードを用いた自己評価活動等の工夫を行った。その結果、依存の原因を「コンテンツの魅力」「中毒性」「他者との関係」の3つに分類でき、児童

○論文の被引用		H30. 2	が改善策を考える視点となった。また、学習カードを用いた自己評価活動は、継続的な自己評価により、ゲームやインターネットと自分の関係を児童が客観的に見直す機会となった。さらに、保護者の協力が得られ、家庭でのルール作りの契機ともなった。 日本数学教育学会誌において、論文が引用された。 引用された論文：「どちらがひろい」新しい算数研究 No529 156-161 頁 引用した論文：大石京子・横須賀咲子・宮田花「量と測定についての理解の基礎となる経験を豊かにするための一実践 ―直接比較を重視した広さ比べの活動を通して―」日本数学教育学会誌 第100巻第2号 2-9 頁	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 算数の指導事例集② ー基礎学力を確実にし、高次の学力を伸ばすー 3・4年生	共著	H28. 1	教育同人社	算数教育の理論を踏まえた、基礎学力を確実にするとともに、問題を自ら見いだしたり、よりよい解を見つけたりするような発展的な考えをする高次の学力を育てる、利用範囲の広い事例集として編集された。 B5 版 全 159 頁 総編集：片桐重男 編集委員：荒木正志 内藤和巳 上野和彦 茂呂美恵子 本人担当部分 第2章第10節 円の導入 (pp. 58-61) 本事例のねらいは、児童に円の性質を利用して円の特徴を捉えさせ、円の理解の幅を広げることである。様々な丸い形の中から円を選び、半分に折る活動を通して円の特徴を帰納的に捉えられるようにし、「直径」「半径」「中心」の用語を指導する。本事例で学習したことを使って円と楕円や卵形の違いを演繹的に明らかにし、円の特徴、「直径」「半径」「中心」の理解を深められる。
2 算数教科書 新しい算数	共著	R2 年度版	東京書籍	本人担当部分 本文執筆 教師用指導書執筆
3 算数教科書 新編 新しい算数	共著	R6 年度版	東京書籍	本人担当部分 本文執筆 教師用指導書執筆
(学術論文)				
1 小学校算数科における問題解決型授業の困難性とその改善に関する一考察 ―授業の「予期的モデル」と「偶発的モデル」の葛藤解消に着目して― (学位論文)	単著	R 元. 9	東京学芸大学 大学院	本研究では、質の高い「問題解決型授業」の実現に向け、授業の困難性の分析と改善策の検討を行った。現職教員への実態調査と先行研究の考察の結果、教師は「予想外の反応の把握と解釈」「反応に応じた意思決定」「授業内での目標の再設定や修正」に困難性を感じていることが明らかになった。その困難性を、Kilpatrick & Silver が指摘する「予期的モデル」と「偶発的モデル」の葛藤ととらえ、児童の反応に対応しながら展開する授業を「予期的モデル」と「偶発的モデル」の葛藤が解消された授業と定義し、授業分析を行った。その結果、このような授業は算数科の本質的な学習課題を内在しうることが明らかになり、児童の反応の把握と解釈、展開の意思決定、教授行動の選択を連続的に行う教師の専門的力量が求められることが明らかになった。 A4 版 全 134 頁
2 第3学年における「D データの活用」の指導に関する一考察 教材学研究第36巻 (査読あり)	単著	R7. 3	日本教材学会	本研究の目的は、第3学年における「D データの活用」領域の指導について、児童が自ら目的を決め、データを収集し、結果を表現、考察することをねらいとした授業実践「表・グラフでニュースをつくろう」の、数学的活動としての価値を検討することである。本単元には、項目の取り方や並べ方、目盛りの付け方、読み方、表題の付け方等の指導すべき内容が含まれており、教師が適

				切に指導するためには、教科書の場面設定や数値設定を生かした展開を中心とすることが望ましい。その過程で、児童から「自分でもテーマを決めて表やグラフをかいてみたい」という願いを引き出し、単元終盤において、学習したことを活用した主体的な統計的探究プロセスを取り入れる単元構成を構想した。この数学的活動の中で、児童は正確な調査のためにデータの収集方法を見直したり、集まったデータの整理の仕方を工夫したりといったいくつかの学びを成立させていた。また、調べたことをポスターに表現する活動では、表・グラフに関する知識を自ら活用する機会となっていた。さらに、算数科に苦手意識をもつ児童には、意欲的な活動の場が拓かれた。課題として、指導時数の設定の仕方がある。他教科等と関連させることも検討したい。
(その他)				
1 研究報告書 (共同研究) 表現力を育て、学びを深める指導の工夫 ー伝え合いながら問題解決する授業を通してー 平成 22 年度東京都教育研究員小学校算数自主報告書 II 研究のねらい III 研究仮説 IV 研究の方法 pp. 4-6	共著	H23. 3	東京都教育研究員 小学校算数	本研究では、伝え合いながら問題解決する授業を通して、表現力を育て、学びを深める指導を目指した。集団検討構想図を作成すること、自分の立場を明らかにして集団検討に参加すること、まとめの充実を図ることを手だてとした。研究の結果、集団検討に参加する目的の明確化、児童が自らまとめを書くこと、児童自らが理解の度合いを確認できる自己評価といった成果が見られた。 共同研究者：赤坂弘樹 浅見朝枝 加藤賢一 小泉友 河内麻衣子 小林義史 佐々木順子 鈴木博之 内藤信義 中村将行 成田弥生
2 口頭発表及び発表記録 都算研実態調査の課題解決を目指した指導の工夫 ー第 5 学年単位量あたりの大きさの指導からー 日本数学教育学会誌 第 95 回大会特集号 p. 116	単著	H23. 8	日本数学教育学会 第 95 回大会 (山梨大会)	本事例では、3 つの部屋の混み具合をどちらか一方の量の大きさにそろえて比べる方法を多様に考える算数的活動が有効であると考えた。本時では、それぞれの方法が妥当であるかの話し合いを通して、混み具合の意味を考え理解することができた。また、立式の目的を意識し、「人数で」「面積で」などと明記してから立式している児童も見られ、混み具合の正しい判断につながった。
3 公開授業及び授業記録 創造する算数教育を求めて 子供の意欲を高める算数 1 年 どちらがひろい 新しい算数研究 No.529 pp. 156-161	単著	H26. 1 実践 H27. 2 発行”	新算数教育研究会 第 30 回 小学校算数教育研究全国（東京）大会	新算数教育研究会第 30 回小学校算数教育研究全国（東京）大会（北区立王子小学校）において、第 1 学年「どちらがひろい」の授業を公開した。本単元のねらいは、身の回りにあるものの面積を直接重ね合わせたりものを並べたりして比べる活動を通して、面積の測定についての基礎となる経験を豊かにすることである。児童の意欲を高めるために、「比べてみたい」と感じる導入、「どうやって比べようか」と考える展開、「なるほど、わかった」と納得するまとめという 3 つの教師の意図的な働きかけを意識した授業を行った。
4 研究報告書 (共同研究) 一人一人の思考力・表現力を育てる指導の工夫～関数の考えを大切にした授業～ 平成 26 年度研究開発委員会指導資料集 実践事例 6 年・速さ pp. 59-63	共著	H27. 3	東京都教育委員会	本研究では、研究主題を「一人一人の思考力・表現力を育てる指導の工夫～関数の考えを大切にした授業～」と設定し、①ある場面での数量や図形についての事柄が、ほかのどんな事柄と関係するかに着目できるようにする。②二つの事柄の関係を調べる活動を取り入れる。③見いだした規則性を様々な問題の解決に活用し、その思考過程や結果を表現したり説明したりする活動を取り入れることの 3 点を重視した指導事例を作成した。
5 研究紀要（共同研究） 自らの思考力・表現力を高め合う指導の工夫 ～算数科を中心に～ 平成 27 年度台東区立台東育英小学校研究紀要 II 研究の概要 pp. 3-7 実践事例 4 年・どのように変わるか調べよう pp. 64-70 V 成果と課題 p. 123	共著	H28. 3	東京都台東区立 台東育英小学校	本研究では、「自らの思考力・表現力」を「児童一人一人が見通しをもち筋道立てて考え問題を解決する力、問題を解決する過程で自分の考えをいかしたり伝えたりする力」ととらえた。自分の考えを表現したり、説明したりする活動を充実させることが、思考力・表現力の育成につながるという仮説をもとに研究を進めた。研究主任として、研究理論の構築と授業公開を行った。
6 口頭発表及び発表記録 (共同発表) 数学的な思考力・表現力を育てる指導の工夫 第 4 学年四角形を調べよう ー図形の定義や性質の理解を深める	共著	H28. 12 発表 H29. 3 発行	新算数教育研究会 第 40 回セミナー	作図指導における数学的な思考力・表現力を、「図形の定義や性質を使って作図し、作図の方法を演繹的に説明する力」ととらえた。第 4 学年の「四角形を調べよう」の単元を取り上げ、「図形の定義や性質の理解を深める作図指導の工夫」を追究

作図指導の工夫－ 新しい算数研究 No.542 pp. 183-188				した。単元の指導計画の見直しやワークシートの活用によって、作図の仕方を図形の定義を使って簡潔に説明する児童の変容が見られた。 共同発表者：戸塚則子”
7 論文 たし算とひき算のひっ算（第2学年） 新しい算数研究 No. 558 pp. 48-50	単著	H29. 7	新算数教育研究会	本実践では、片桐重男氏の「ひき算マジック」の問題を取り上げた。本実践の意義は、問題を解決する過程でひき算の筆算を繰り返し練習できること、第2学年の発達段階に即して帰納的に考える経験を積むことができることである。導入における教師と児童の対話により、「きまりを見つけない」という問いを引き出し、授業の終末には、「はじめはきまりが分からなかったけど、最後は分かってよかった。」という振り返りが見られた。
8 口頭発表及び発表記録 小学校算数科の授業における「トピック教材」の意義と課題 ー子どもの問いを軸にした問題解決的な学習過程を目指してー 日本数学会第29回研究発表大会 研究発表要旨集 pp102-103	単著	H29. 10	日本数学会 第29回研究発表大会	本研究の目的は、数学的に問題解決する過程を重視した授業に向けて、児童の問いを引き出す教材の1つとして「トピック教材」を取り上げた。まず、「トピック教材」を「単元外で思考に焦点を当てた1時間程度で扱う問題」と定義し、その意義と課題について検討した。さらに、第3学年「虫食い筆算」の実践事例を示した。
9 口頭発表及び発表記録 算数科問題解決型授業に関する研究の系譜1 日本数学教育学会誌 第100回大会特集号 p. 156	単著	H30. 8	日本数学教育学会 第100回全国算数・数学研究東京大会	本研究の目的は、算数科における問題解決型授業に関する研究の系譜を考察し、今後の学校現場における授業改善に生かすことである。今回は、菊池兵一の著作「数学的な考え方を伸ばす指導」（1969）を取り上げ、数学的な考え方の指導と問題解決型授業の関連について考察した。
10 論文 育児生活に役立つ算数 新しい算数研究 No. 572 pp. 34-35	単著	H30. 9	新算数教育研究会	学習指導要領の算数・数学の学習過程の一つに、「日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に処理し、問題を解決する」ということが示されている。本論文では、育児生活の中から、「ミルクを作る場面と比例」「洗剤の量と割合」「育児の記録表と統計」について取り上げ、日常生活場面で算数・数学を活用できることを考察した。
11 論文 分数（第4学年） 新しい算数研究 No. 600 pp. 54-56	単著	R3. 1	新算数教育研究会	学習指導要領には、時刻や時間の計算を分数を用いて処理し、分数の計算が日常生活にも使えることに気付くことの必要性が示されている。しかし、教科書での扱いは各社で異なり、時刻や時間の計算に分数を用いているものは少ない。このことを受け、本実践では、第3学年で学習した時刻と時間の計算を分数を用いて考える数学的活動を設定し、教材としてパターンブロックを活用した。その結果、パターンブロックは分数と時間をつなぐ教材として有効に働き、児童は、分数と時間を関連付けて考えることができた。
12 論文 1人1台端末時代の小学校低学年における情報モラル指導のあり方 ～ゲーム、インターネットへの依存に着目して～ 公益財団法人日本教育公務員弘済会 東京支部 令和5年度教育実践論文集録第2集 pp. 23-26	単著	R5. 12	公益財団法人 日本教育公務員 弘済会東京支部	筆者が行った児童、保護者への実態調査結果からは、低学年の段階ですでにゲームやインターネットが児童にとって身近なものになっていること、低学年の児童においても依存を自覚していること、保護者は、我が子の依存に問題意識はもっているがどう対応すべきか苦慮していることが明らかになった。これらの実態を踏まえ、2年生を対象に学級活動（2）「やりすぎでないかな」の授業を実践した。探究的な課題追究の過程として3つの場面を設定、実態調査結果の活用、思考ツールを用いた話し合い、学習カードを用いた自己評価活動等の工夫を行った。その結果、依存の原因を「コンテンツの魅力」「中毒性」「他者との関係」の3つに分類でき、児童が改善策を考える視点となった。また、学習カードを用いた自己評価活動は、継続的な自己評価によってゲームやインターネットと自分の関係を児童が客観的に見直す機会となった。さらに、保護者の協力が得られ、家庭でのルール作りの契機ともなった。

（注）「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。